北海道新聞　2025年（令和7年）4月9日（水曜日）

北海道地学協働アワード2024

津別高 2年連続準V

町民との新たな交流評価

賞状と表彰状を手にする蒲生優斗さん（前列左）、平子裕教諭（同右）、上田弘恵教諭（後列左から2人目）、鎌田聖子養護教諭（同3人目）

【津別】地域と連携して課題解決に取り組む高校が成果発表する、北海道教育委員会主催の「北海道地学協働アワード2024」で、津別高（太田徹校長）が2年連続で準グランプリを獲得した。地元探究授業「つべつ学」を続け、同校生徒と地元町民の新たな交流が生まれていることなどが高い評価を受けた。

「つべつ学」は同校の上田弘恵教諭が中心となり、2019年度から授業として実施。1年生は農業や林業、2年生は津別の歴史や町政の基本的な仕組みなどについて学び、北大公共政策大学院の学生団体「HALCC（ハルク）」との連携授業もある。3年生で成果発表を行う。

同アワードは24年度で3回目。同校を含め全道17校が応募し、資料や発表動画を通じて審査があった。2月6日の本審査でグランプリ、準グランプリ各1校、特別賞4校を選出。グランプリは釧路管内弟子屈町の弟子屈高だった。

3月18日に津別高で行われた伝達式で生徒代表として賞状を受け取った蒲生優斗さん（18）＝3月に卒業＝は「地域の人たちと積極的に関われたことが良かったと思う」と振り返り、後輩たちに向け「いろいろな人と関わり合うことで人は成長できる。積極的に関心を持ってほしい」と語った。

同アワードのほか、24年度の文部科学大臣優秀教職員表彰を受けた上田教諭は「授業を始めて5年。地域と学校の架け橋となった。こういう結びつきがこれからも続いてほしい」と笑顔で話した。

またハルクとの連携授業などに携わった平子裕教諭には道教委表彰、鎌田聖子養護教諭にはオホーツク教育局から管内教育実践表彰がそれぞれ贈られた。（青山秀行）